

機関番号：40109

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19330123

研究課題名(和文) 日系ブラジル人児童を中心とした多文化保育の総合的研究

研究課題名(英文) General research centered on the multi-cultural child care of Japanese Brazilian children

研究代表者

品川 ひろみ(SHINAGAWA HIROMI)

札幌国際大学短期大学部・幼児教育保育学科・准教授

研究者番号：80389650

研究成果の概要(和文)：

本研究は日系ブラジル人児童を中心とした多文化保育の現状と課題を、日本の保育の現状と課題を中心に、学校教育後の課題や、ブラジル人児童の母国であるブラジルの保育の現状も踏まえながら明らかにした。特に日本においては、ブラジル人児童を多く受け入れている保育所の保育士たちがどのような意識を持ち多文化保育を実践しているのかを検討し、望ましい多文化保育の実践には何が重要かについて検討している。

研究成果の概要(英文)：

This research focused on the current situation and problems of child care in Japan, and took issues school education and the current situation of child care in Brazil - Brazilian children's home country - into consideration. It also indicated the current situation and problems of multi-cultural child care centering around the Brazilian Japanese children.

It was especially studied that what consciousness they should have to practice the multi-cultural child care for nursery teachers who work in the nurseries in Japan which receive a large number of Brazilian children, and what is the most important in the practice of ideal multicultural child care.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
総計	9,200,000	2,760,000	11,960,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：

キーワード：日系ブラジル人・多文化保育・エスニシティ

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は多文化保育の現状と課題を、多角的な視点から明らかにすることである。研究開始当初、日本の認可保育所には多くのブラジル人児童が入所していた。それに伴い、それまで外国人児童の保育に経験のない保育士たちが、どのように保育をすすめるのが課題となっていた。また日本の認可

保育所だけではなく、ブラジル人対象の託児所にも多くのブラジル人児童が入所している実態もあった。

ブラジル人児童を取り巻く問題は、学校教育後については、社会的にも着目されており、具体的な対策も講じられている。しかしながら就学前の保育については、ほとんど対応がなされておらず、その実態さえ明らかになっ

ていない状況である。そこで本研究では、それらの現状や課題を明らかにしたいと考えている。

2. 研究の目的

本研究では3つの点を明らかにすることを目的とした。一つ目は日本国内における外国人児童の実態と保育の実態を明らかにすることである。次に保育機関とそれを取り巻く保育士や保護者の意識を明らかにすることである。これについては特定の地域の実証的な研究をとおして明らかにする。

最後に子育て意識の国際比較である。日本の保護者とブラジル人の保護者がどのような子育ての共通点を持ち、相違点を持つのかを明らかにすることは、日本におけるブラジル人児童の保育を進めるためには必要だと考えるからである。

3. 研究の方法

研究の方法は国内及び海外においての社会調査を中心としている。具体的には国内では日系ブラジル人が集住している地域である、静岡県浜松市や福井県越前市、愛知県知立市の保育所や託児所、学校を対象にして、保育者や教師、保護者に対する調査を実施した。また海外においては、ブラジルの中心的な都市であるサンパウロを中心に調査をすすめた。サンパウロ教育局においては、幼児教育の現状や方針についてヒアリング調査をすすめ、実際に公立の保育園を訪問調査している。また日系人が多く入園している学校を対象として、保護者に対するアンケート調査も実施している。また都市部と比較するため東アマゾン地域であるパラ州トメアスの保育施設についても訪問調査している。

4. 研究成果

研究成果としては国内および海外の調査の結果を検討し、分析することによって明らかにしている。具体的な成果としては下記に記載する論文が中心となっているが、今後もまだ分析途中のデータの分析をすすめ、学会等で発表していく予定である。

以下ではこれまでに明らかになった知見を中心として述べる。

(1) 多文化保育の意識に関して

現在の日本において多文化保育という言葉は、単に外国人児童と日本人児童とともに保育するという実態を示す言葉として使用されている場合と、本来の意味における理想としての内容をともなったものまで開きがある現状である。本研究では多文化保育を後者と捉えた上で、そのような保育に近づけるためには何が必要かを保育士の意識から検討した。その際、保育士たちが①差異をどの

ように捉えて、②どのような対応をし、③それによってどのような負担を感じながら保育を実践しているかを、保育士たちを取り巻く環境に着目しながら明らかにした。

その結果、ほとんどの保育士が日本人児童とブラジル人児童の差異を認識し、対応しなければならないものとして捉えていた。具体的にはポルトガル語を使う、絵カードを作成するなど、子どもの様子を見ながら徐々に進めていた。一方で多くの保育士が保育の難しさも感じていた。それは日本人児童だけの場合には生じない難しさであり、ストレスに繋がる負担感である。しかし保育士たちはブラジル人児童の受け入れには肯定的な者が多かった。そのような意識を支えるものとして、2つの要因があった。1つ目には通訳の存在である。通訳は単に言葉の伝達者としてだけではなく、日系ブラジル人児童を取り巻く文化を説明する役割を果たすことで、保育士たちの理解が深まり、日常に生じる問題に対応できていると考えられた。さらにもう一つの要因として、当該園が多文化共生保育を行うことを、保育の方針としてあげていることが考えられる。園の方針や特徴として具体的な内容を示すことで、保育士たちに自然と多文化保育の理念が浸透しているといえよう。

(2) 多文化保育をすすめるための環境要因としての通訳の存在

多文化保育をすすめるための環境要因のなかでも注目されるのは通訳の存在である。そこで多文化保育を実践している保育所において、通訳がどのような役割を果たしているのかについて、保育士がどう評価しているのかという保育士の視点を中心に考察した。その際、「日常の保育」と「文化保障」という2つの視点で検討した。

まず日常の保育においては、通訳の存在は大変重要であり、通訳がいる事で子どもへのコミュニケーションも、保護者へのコミュニケーションも飛躍的にすすむことが確認された。日本人保育者だけでも、各々の保育士の自己努力によって、コミュニケーションは可能であるが、実際に通訳を介した保育をすることで、細かいところにまで配慮した保育が実現できることが分かった。もう1つの課題である、多文化保育の実践として、通訳がどのような役割を果たしているかという事についても、通訳が子どもの母語や文化を保障する役割としても機能していることが分かった。しかし一方で、日本人保育者たちの意識については、子どもの文化保障という意味では物足りない面もあった。これについては、先行研究でも指摘されているように、日本の保育者養成の課程では多文化保育を学習する機会がないことがあげられる。そのため多くの保育士は多文化的な視点を持ちにくい

のが現実であり、引き続き重要な課題である。だが実際に外国人保護者と接するなかで保育士自身が気づく側面もあり、通訳はそれらをつなぐ意味でも今後大いに期待される。

また通訳が常駐している保育所と、巡回型の保育所では、通訳の役割そのものは保護者や子どもとのコミュニケーションの架け橋として重要な機能を担っていることが分かったが、巡回型では時間的な制約があり、日常の保育の対応に終始してしまいがちであった。これらのことから、多文化保育の質の向上のためには、単なる通訳者としてだけでなく、子どもの文化保障の役割としての通訳の配置が重要な視点となるといえよう。

(3) 学校教育後の現状

学校教育段階のブラジル人児童の現状を明らかにすることは、多文化保育の望ましいあり方を探るために有効である。

ブラジル人児童が半数という愛知県のある小学校を対象として調査を行ったところ、学校教育で特に課題となるのが日本語の学習であることが指摘された。入学あるいは転入時に母語がメインで日本語はまったく話せない、あるいは話せても少ししか話せないという児童も多い。しかしその子どもたちが日本語を習得するまでの時間についての認識は多少ばらつきがある。これは今までの指導の経験に加えて、各教員が現在担当するクラス全体のレベルや児童個人の能力、家庭環境を含めた総合的な目安として提示されているからである。そのような中でも、就学前の保育がどのように影響しているかという視点で見れば、やはり保育所や託児所に通っていた児童のほうが、そうでない児童に比べて相対的に指導しやすいという認識がある。しかしさらに詳細に見れば、特に知的な面については、日本の保育所とブラジル人託児所の差にはいくらかの違いがみられ、入学時に児童が取り組んだ課題では日本の保育所経験がある児童は比較的できる傾向が高かったという。これらのことは、日本の保育所が行っている取り組みの一つの成果であると位置づけられ、日本の認可保育所の取り組みが学校教育後に成果として表れているとも考えられる。

(4) ブラジルにおける保育

①サンパウロの保育の現状

ブラジルには0～3歳児を対象とした保育園と、4～6歳児を対象とした幼稚園の2種類の就学前教育機関がある。かつて保育園は社会福祉省の管轄であったが、1996年の国家教育基本法（「教育の方針と基礎に関する法律（Lei de Diretrizes e Bases da Educação Nacional, 通称LDB）」）の公布を機に教育省の管轄に移され、幼稚園と同様、就学前の

子どもたちを対象とする幼児教育機関になった。現在では、幼稚園と保育園で行われる幼児教育は、教育と保育を統合したものとして位置づけられ（São Paulo, Secretaria Municipal de Educação. Diretoria de Orientação Técnica 2006b, *Tempos e espaços para a infância e suas linguagens nos CEIs, Crèche e EMELs da cidade de São Paulo* (São Paulo, Secretaria Municipal de Educação):17-20)、両者は対象とする子どもの年齢によって区別されるだけとなっている。しかし、保育園と幼稚園では、就学率が異なり、保育園の対象となる0～3歳児の就学率は2002年で11.7%、幼稚園の対象である4～6歳児が67.0%となっている。さて、サンパウロ市独自の教育方針は、教育内容にも見いだせる。教育内容については、幼児教育も含めて、ナショナル・カリキュラム・ガイドラインがある。これは、カリキュラムの国家基準といえる。ただし、これも大まかなものであり、ガイドラインに沿って、より具体的なカリキュラムを設定するのは、自治体などの各種教育機関の設置者にまかされている。

サンパウロ市教育局では、幼児教育の教育内容に関して、独自に指針を作成している。最近では、2005年以降、自己点検・自己評価のために、押さえるべきポイントを示したガイドラインのようなものを作成したという。

②日系ブラジル人保護者の意識

サンパウロ市はブラジル最大の都市であり、公立の学校に加え私立の民族系の学校が多数存在する。民族系の学校は日系だけでなく、ドイツ系、イタリア系などの複数の学校がある。その多くはそれらの国の文化を特徴としているが、必ずしもその国の子弟だけを対象にしたものではない。また、ほとんどの学校ではブラジルの共通言語であるポルトガル語で授業が行われている。つまり、学校はブラジル社会を現すように、常に複数の文化が存在しているのである。日系の学校も、日本とブラジルの文化をベースとしながら、それ以外の国の文化が交差する多文化社会となっている。

今回われわれはサンパウロ市にあるいくつかの学校を訪問した。その一つである日系の学校を対象に、アンケート調査をおこなった。多文化社会の中で生活している保護者がどのような子育てを行い、子育ての意識を持っているのかを明らかにすることが目的である。

本調査の回答者はそのほとんどが日系人であり、日本にそのルーツを持つ人たちである。しかし子育ての実態や考え方を見ると、日本の子育てと共通な点を持ちながらも異なる傾向も見られた。特に子育ての意識の中で日本と異なる点について整理すると次の

4 点にまとめることができる。

「哺乳瓶の使用時期や離乳食からの移行時期などに違いが見られること」「教育への期待が非常に高いこと」「親や目上の人を尊敬する等、しつけ面を重視していること」「子育ては親自身の責任だと考えていること」

このように、ブラジル本国に在住する日系ブラジル人の子育てに関する実態や意識は、日本にルーツを持ちながらも、ブラジルという多文化の国において新たに形成されたいわばハイブリッドな子育て観と言えるのではないだろうか。それは、ある面では日本の伝統的な文化を受け継ぎ、ある面では他の国の文化とミックスされた部分を持つ。本調査はブラジル都市部の、日系人を中心とした子育て意識を見たもので、これがブラジルの子育て全てを表すものではないが、日本にデカセギに来ている日系ブラジル人の意識とは重なる部分が多いと考えられる。ただし本調査の対象者はサンパウロ市内においても比較的豊かな階層の人々であったため、日本にデカセギに来ている人々との共通点については、さらに慎重に検討する必要があるだろう。

(5) おわりに

本研究では4年間の研究の期間のなかで2冊の報告書を刊行している。『多文化保育研究』研究報告書1では、国内では浜松市を対象にした調査をもとに、認可保育所の保育、保育士や保護者の意識、ブラジル人託児所の現状などを明らかにした。またブラジル調査においては、都市部であるサンパウロの保育の現状を日系の教育施設を中心に検討した。また東アマゾン地域のトメアスーにおいて、その地域に暮らす日系人の子育て意識について報告している。

『多文化保育研究』研究報告書2では、国内調査として、日系ブラジル人が集住している愛知県知立市の学校と保育所を対象とした調査に加え、福井県越前市の保育所を対象とした調査の結果を報告した。なかでも保育所調査では、保育所における通訳を一つの視点として、それらの検討をしている。

また国外調査においては、サンパウロの民族系の学校の調査結果から、幼児教育の特徴について比較検討している。

これらの結果は上記で述べた研究成果や以下の論文や発表で明らかにしている部分もあるが、それ以外の内容については、今後さらに分析をすすめて、発表していきたいと予定している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 品川ひろみ, 2011, 「多文化保育における保育者の意識 - 日系ブラジル人児童の保育を中心として -」『現代社会学研究』VOL24 : pp. 23~41.
- ② 品川ひろみ, 2011, 「多文化保育における通訳の意義と課題 - 日系ブラジル人児童を中心として -」『保育学研究』第49巻(掲載予定)

[学会発表] (計2件)

- ① 「デカセギが家族に与える影響 - 日系ブラジル人児童を中心として」第19回日本家族社会学会大会自由報告 2009年9月
- ② 「多文化保育の現状と課題 - 日系ブラジル人児童を中心として」北海道子ども学会第15回大会ポスター発表 2010年8月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

品川 ひろみ (SHINAGAWA HIROMI)
札幌国際大学短期大学部・幼児教育保育学科・准教授
研究者番号 : 80389650

(2) 研究分担者 (なし)

(3) 連携研究者

小内透 (ONAI TORU)
北海道大学・教育学研究科(研究院)・教授
研究者番号 : 80177253
小野寺理佳 (ONODERA RICA)
名寄市立大学・保健福祉学部・教授
研究者番号 : 80185660
新藤慶 (SHINDO KEI)
新見公立短期大学・幼児教育学科・講師
研究者番号 : 80455047
野崎剛毅 (NOZAKI YOSHIKI)
國學院大學北海道短期大学部・幼児児童教育学科・准教授
研究者番号 : 50412911
伊藤寛 (ITO HIROSHI)
札幌国際大学・人文学部・教授
研究者番号 : 20232465
アンジェロ・イシ (ISHI ANGELO)
武蔵大学・社会学部・教授
研究者番号 : 20386353